

奥久慈漆を知っていますか？

漆とは・・・

日本・中国・朝鮮半島に分布するウルシ科ウルシ属ウルシ種の落葉広葉樹であるウルシノキの表面を傷つけて採取される樹液を言います。

漆は、漆器はもとより、国宝や重要文化財の修理・修復には欠かせない素材です。文化庁は平成30年度には、国の重要文化財等の修復などに100%国産の漆を使うことを目指しています。

茨城県の漆の生産量は全国第2位で、そのほとんどが本市と大子町周辺で生産されている奥久慈漆です。奥久慈漆は、透明度が高く光沢も良く、その品質は日本一とも言われています。

市内では、古くからウルシノキが栽培され、漆掻きが行われてきました。栽培用のウルシノキを里漆、山に自生しているものを山漆と言ひ、一般的に漆と呼ばれるのは里漆です。

現在は、奥久慈漆生産組合（組合長：神長正則さん）がウルシノキの苗を育成し、主に畑だった耕作放棄地に植え付け、家和楽・盛金・舟生・諸沢地区一帯の約9ヘクタールで栽培をしています。

さらに、組合では、漆を伝統産業として引き継ぐだけでなく、最新の科学技術で里漆を調査し、効率良くより多くの樹液を取れるよう研究も進めています。今後の更なる調査研究が期待されています。

本市が、全国有数の漆の産地であり、最先端の科学技術を駆使した研究のフィールドであるにご存じでしたか？



▲ 植栽した漆林



▲ 目立て



▲ 漆液

漆掻きの手順

漆掻きは、毎年6月中旬から10月初旬まで行われます。漆掻きを行う前に、ウルシノキに傷を付ける作業があります。これは、「目立て」と呼ばれるもので、木に傷を付けてこれから樹液を取ることを木に合図するためのものです。目立てから4日後に、その上に2回目の傷を付け、またそれから4日後に3番目の傷を付けます。この3番目に付けた傷の部分からにじみ出てくる白い液体を漆掻きの道具の一つであるヘラで掻きとるのが漆掻きです。それを何回か繰り返しますが、一度掻いたウルシノキは続けて掻かず、4日間置いて木に回復期間を与えてから再び掻きます。

ウルシノキは植栽してから約10年経って漆を掻くことができます。しかし、1本のウルシノキから採取できる漆はわずか180gから200g程度。掻いたウルシノキは、たった1シーズンで切り倒されてしまいます。このようなことから、いかに漆が貴重なものか分かります。

うるしの日

11月13日はうるしの日です。この日は、日本漆工芸協会が昭和60年に制定しました。その云われは、平安時代のこの日に、文徳天皇の第一皇子・惟喬親王が京都・嵐山の法輪寺に参籠し、漆の製法などを虚空蔵菩薩から伝授されたという伝説からだそうです。

漆かぶれ

漆の樹液に触れるとやけどのようになってしまう、いわゆる「かぶれ」を起こします。ウルシノキは、皮と木の間に漆の成分が溜まっています。漆の樹液に触れないよう注意が必要ですが、まれに樹液に触らずウルシノキの下を歩いたりするだけでも気化した漆にかぶれることがあります。



▲ 作品

山方漆ソサエティー

漆と漆器の振興を目的に、毎年漆塗り講習会や作品展などさまざまな活動をしています。

漆の実

漆の実からは、蠟燭の原料となる木蠟が採れます。漆の実は蠟分という成分を含んでいて、この蠟分を絞出して蠟燭などの原料として用いられてきました。木蠟はすずが出やすいため、のちにハゼ蠟が一般的になりました。

漆の花

ウルシノキは6月を過ぎると、黄緑色の花序（写真赤枠内）をつけます。その香りは、ふんわりと優しく爽やかなもので、ごつごつした樹木やかぶれを起こす樹液など、漆のイメージからは想像ができないほど可憐なものです。



▲ 漆の花

漆の土器

日本人と漆との関わりは古く、遺跡の発掘調査結果などから、縄文時代には漆がすでに利用されていたことが知られています。市内でも発見例がいくつかありますので、その1つを紹介します。

平成3年、小瀬高校のグラウンド整備のために行われた発掘調査で、平安時代の集落が確認され、その際、中に入れた漆がそのまま固まった土器が発見されました。この土器は、漆を塗るときのパレットとして用いられたものと考えられ、9世紀ごろの竪穴住居の床面に置かれた状態のまま、土に埋まっていた。当時の漆を用いた作業の雰囲気がよく伝わってくる発見です。この土器は、緒川総合センター図書室前に展示されていますので、ぜひご覧ください。



▲ 漆のかたまり



▲ 北富田の大漆

記事作成にあたり、神長正則さんにご協力をいただきました。参考資料：茨城のうるし（茨城県・奥久慈うるし振興会）